

## 学習院大学蔵奈良絵本『一本菊』（零本）

谷 嶋 美和乃

### 論文要旨

学習院大学哲学科は、奈良絵本『一本菊』一冊を所蔵している。本書は、物語本文を照らし合わせると、物語の三分の二ほどを欠いているため、三冊本の下巻にあたると考えられる。挿絵は全八図ある。天地に薄い水色、白色のすやり霞を引き、金や銀の装飾的な雲も配されている。建物の描写はやや不自然な構造がみられるが、人物や画中画は細やかで丁寧に描かれている。

『一本菊』は、写本・刊本とも伝本が多い。本文はA系統とB系統に大別されるが、諸本間にやや異同があり、細分化は難しいという。本書の本文をそれらと比較してみると、慶應義塾図書館蔵の写本と同じA系統に属すとみなされる。その中でも、パリ国立図書館東洋写本部スミス・ル・コレクシオン蔵の奈良絵本（寛文頃書写）に、細かな異同は多くみられるが、近似していることが分かった。奥書に「永禄三年八月上旬書之了」とあり、年代の記された貴重な伝本の一つであるので、本稿にて資料解題と全翻刻を挿絵も含め掲載することとした。

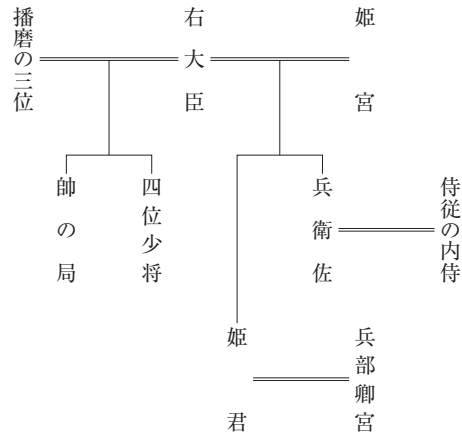
キーワード【一本菊、永禄三年、御伽草子、奈良絵本、物語絵画】

『一本菊』とは、室町時代の御伽草子で、『風葉和歌集』所載の散逸物語『あだ波』の改作といわれている。『伏屋の物語』『岩屋の草子』とともに継子物に分類されるこの物語は、それぞれ男女の兄妹という設定の実子（兵衛佐と姫君）と継子（四位少将と帥の局）が登場し、筋は複雑で起伏に富んだものとなっている。

まず簡単なあらすじを記しておこう。なお、主な登場人物の系図を【挿図1】にあらわす。

右大臣と姫宮との間に兵衛佐、姫君の兄妹がいた。母が亡くなり右大臣は新たに播磨の三位を妻に迎え、四位少将と帥の局をもうける。その後、右大臣が亡くなり、四位少将が跡を継いだ。ある年、兵部卿宮が催した菊の宴をきっかけに、宮は美しい菊を育てていた姫君のもとへ通うようになる。それを妬んだ継母播磨の三位は、兵衛佐と姫君を亡き者にしようとする。五節の夜、四位少将が殿上人に闇討ちにあい、それを播磨の三位は兵衛佐の仕業と帝に奏上す

【挿図1】 主な登場人物系図



の間には男御子が生まれ、宮は帝となる。兵衛佐は都へ呼び戻され、関白となり、内侍は北の政所となり子も生まれる。播磨の三位とその子らは都を追放される。宮と兵衛佐らの一族は子に恵まれ、繁栄した。

『二本菊』は、写本、刊本とも伝本が多く、人気のあったことがうかがえる。伝本について、松本隆信氏は本文の系統を大きくA系統とB系統とに分けたうえで、諸本ごとに語句の小さな異同があるため、これ以上の細分化は難しいとされる。<sup>1)</sup> 松本氏の分類をさらに進めた菅原領子氏は、諸本の系統についておおよそ次のようにまとめている。<sup>2)</sup>

る。兵衛佐は薩摩の国

に島流しとなり、姫君も播磨の三位によって

四条辺に幽閉される。

その後、兵衛佐の恋人

であった侍従の内侍

は、乳母と共に薩摩へ

下り、兵衛佐と再会す

る。一方、姫君は播磨

守の目代に奪われそう

になるが、兵部卿宮と

再会し結ばれる。二人

A

(一) 慶應義塾図書館蔵 写本一冊 室町末江戸初期間<sup>3)</sup>

(二) 天理図書館蔵 写本一冊 室町末江戸初間

(三) 大洲市立図書館蔵 写本一冊 室町末江戸初間<sup>4)</sup>

(四) イ 万治三年西田勝兵衛尉刊 絵入大本三冊<sup>5)</sup>

ロ 寛文十一年松会刊 絵入大本三冊

ハ 龍門文庫蔵 写本一冊 寛永頃<sup>6)</sup>

ニ 岡山大学池田文庫蔵 写本一冊 享保十一年

(五) 刈谷市立図書館蔵 写本一冊 江戸後期<sup>7)</sup>

(六) 岩瀬文庫蔵 奈良絵本三冊 江戸前期<sup>8)</sup>

(七) 天理図書館蔵 写本一冊 江戸中期

(八) 慶應義塾大学斯道文庫蔵 奈良絵本三冊 寛文頃<sup>9)</sup>

B

京都大学蔵 写本一冊 江戸前期<sup>10)</sup>

さらに、『奈良絵本絵巻集』五所収の江戸初期の奈良絵本三冊<sup>1)</sup>、同十一所収の江戸初中期の絵巻三卷<sup>12)</sup>、石川透氏蔵の江戸前期の写本一冊<sup>13)</sup>、パリ国立図書館スミス・ル・スエフコレクション蔵の寛文頃の奈良絵本三冊<sup>14)</sup>、高乗勲文庫蔵の写本一冊(残欠本)等の存在も確認されるといふ。

学習院大学哲学科に資料として蔵される『一本菊』（哲学91349A/H77h）は、縦十六、六×横二十四、八糶の袋綴装一冊の横本奈良絵本である。付属文書として旧蔵者によるノートやメモがあるが、公になっていない。よって今回改めて翻刻し、書誌情報とともに本書の特徴についても述べていきたい。

本文料紙は鳥の子紙。丁数は十九丁、字高約十二、五糶、行数は一面十六行。字数は一行約十二〜十六字前後。五丁表のみ散らし書きである。挿絵は全八図ある。内題はなく、奥書に「永禄三年八月上旬書之了」と記されている。市古貞次氏の『中世小説とその周辺』所載「中世小説年表稿」永禄三年（一五六〇）の項「八月上旬 一本菊（渋谷氏蔵零本）奥書 永禄三年八月上旬」にあたるものとみなすことができる。<sup>15</sup>なお、表紙、綴糸、見返し、覆い紙は現代の後補である。<sup>17</sup>

本書は後補の木箱、布を貼った紙製のケースに収められており、ケースには「奈良絵本」と題簽が付いている。木箱の蓋表に植物の絵と「奈良絵本」と記された紙、蓋裏に旧蔵者の手によると思われる「稀観書を ひもとく習ひ 老の春」「三柴」「△之（朱印）」「奈良絵本は眺めるだけでも心が和む 珍本であり貴重書でもある。大切に扱うべし 保存すべき本である。（個人名）二〇〇八・八・八」と記された紙が貼られている。

ではまず、本文について述べていきたい。本書は物語全体の三分の二ほどを欠いているため、落丁もみられるが三冊本の下巻にあた

ると考えてよい。以下、本文にそって内容を紹介し、該当する挿絵箇所を示す。落丁と思われるところは、慶應本やパリ本によって話を補い、（ ）で示した。

- ・（兵部卿宮の母女御が、兵衛佐の妹の姫君と会えずにいる宮をなぐさめようと、鞠のあそびを催す。そこで宮は兵衛佐の想い人である侍従の内侍が、薩摩の国へ流された兵衛佐との別れを悲しみ泣きふしていることを聞く。）
- ・宮は同じ境遇にいる内侍を訪ねる。玄宗皇帝と楊貴妃を描いた扇を見ながら歌を詠む【挿絵第一図】。
- ・宮が内侍のもとを訪れたところを、播磨の三位が見ていた。三位は息子である四位少将と内侍をひき合わせようとするが、内侍は乳母のもとへ逃れる。
- ・内侍は乳母とともに薩摩の国へ向かい、その住人に兵衛佐の居場所を尋ねる【挿絵第二図】。内侍は兵衛佐と文のやりとりをした後、無事に再会する【挿絵第三図】。兵衛佐は、妹の話を聞き悲しみにくれる。妹を思い経を読み、朝夕祈る。
- ・播磨の三位によって四条に押し籠められた姫君は、家の主と親しい播磨の国の目代に言い寄られそうになるが、乳母のごんの少将による清水詣でのおかげで難を逃れる【挿絵第四図】。
- ・姫君は寝られずにいると、外から笛の音が聞こえてくる。それは清水詣で帰りの宮によるもので、ごんの少将は持っていた扇でと

きわを呼び、姫君は宮によって無事救出される【挿絵第五図】。

宮と姫君の間に若君が誕生する【挿絵第六図】。

・(宮の母女御が若君と対面する。時の帝が崩御し、宮が位につき、

姫君は后となる。) 若君は東宮になる【挿絵第七図】。

・兵衛佐は都へ呼び戻され、大納言となる。播磨の三位たちは都から追放される。後に二の宮が誕生し、大納言は関白に、内侍は北

の政所となる【挿絵第八図】。

・帝、関白ともに多くの子が誕生し、それぞれ行く末はるかに栄えたという。

確認できるのは下巻のみのため、諸本と詳しく比較することは難しいが、先に挙げた伝本のうち翻刻されている慶應本、大洲市本、西田刊本、斯道文庫本、京大本、石川本、パリ本と照らし合わせてみたところ、本書では結末に祝儀性、教訓性が強調される傾向がうかがえた。細かな異同等は少なくないが、全体としては本文はA系統に属し、中でもパリ本と近似していることが分かった。パリ本の『ひとと菊』は、寛文頃書写の上中下三冊の奈良絵本である。上册は『新哥仙』と題する歌書が誤って綴じ合わされていたため、物語の前半部分を欠いているが、本文はA系統であるとされている<sup>18)</sup>。なお、本書には冒頭部分と後半の二カ所に文章の脱落がある。三冊本からなる下巻の多くは、兵部卿宮の母女御が姫君に会えずにいる宮をなくさめようと鞠のあそびを催すところから始まり、その

後、宮が侍従の内侍のもとを訪れる場面へと展開する。それに対し、本書は「まつかのつほねを御らんしければなひしはやなき五つきぬきて」と、宮が内侍のもとを訪れているところから始まっている。すなわち、他の三冊本と同様にこれ以前の鞠あそびのエピソードも本書に含まれていた可能性が高く、冒頭部分が欠失したと想像される。なお、付言するとパリ本では鞠あそびのさらに前の、宮が姫君のもとを訪れる場面も下巻に含まれている。

もう一か所は、後半部分にみられる。現在十四丁裏と十五丁表は、挿絵の第六図と第七図の見開き頁になっている。しかし、両図は連続せず独立した別の場面をあらわしているため、この間に本文があったと考えねばならない。十四丁表の本文の、「若君出き給ふ宮御よろこひかきりなし」という場面を描いた第六図に続き、第七図では室内に女性や童がいて、高覧に裾をかけた男性二人が伺候している場面となり、「若みやとうくうに御たちある」と十五丁裏に本文が続いている。よってこれら二図の間に、若君誕生後の、母女御と若君の対面、今上帝が亡くなり、宮が帝位につき姫君が后となるという本文一丁分があったはずで、何らかの理由で欠失したと推測される。

続いて、挿絵についてみていく。挿絵は全八図あり、奈良絵本によくみられる簡略で素朴な画風で描かれている。画面上部に薄い水色、下部には白色の形式化したすやり霞が額縁のように配され、その間に物語の情景が描写されている。それぞれすやり霞は胡粉の線

でくくられている。その額縁の内側にも金と銀の雲形を配し、さらに一部の地面には銀、画中の屏風には金が使われるなど金銀を多用して装飾効果を強めている。屋台は定規引きの直線でしっかりとあらわされるが、直交している部分などにはやや不自然な構造がみられる。また、簀の子の描線は、まっすぐではあるものの太さが均一ではなく、格子の目は等間隔になっておらず、総じて大らかな気分がうかがえる。人物の装束は柔らかな墨線であらわされ、文様は細かく描きこまれている。襖や屏風などの画中画や植物は細やかで丁寧な描写である。人物は、指や足先が長く、顔貌は引目鉤鼻、男性はやや丸顔で、女性には細みの面長に描かれているのが特徴である。

以上、本作の構図法や人物描写、装束や画中画の装飾性といった特性は、十六〜十七世紀のいわゆる奈良絵本にみられるものであり、制作期や絵師を絞り込むことは困難である。しかし、ナイーフだが情感のある人物表現、画面構成にみられる大らかな気分は、本作の魅力とってよいだろう。

ところで、パリ本下巻の挿絵全六図は、①宮が内侍のもとを訪れ扇を見ながら歌を詠む②薩摩の国にて内侍と乳母が住人に兵衛佐の居場所を尋ねる③播磨の目代が姫君のもとに忍び入ろうとする④宮と姫君の間に若君が誕生する⑤兵衛佐は大納言となる⑥宮、兵衛佐とも子に恵まれ栄える場面を描いており、本書でみられた兵衛佐と内侍の再会場面【挿絵第三図】、清水寺詣で帰りの兵部卿宮が姫君と再会する場面【挿絵第五図】は含まれていない。本書とは描かれ

る場面が少々異なり、画面構成、画風も異なるものとなっており、異なる絵画化の視点を示している。

最後に書風についても記しておく。本文の書風は、たっぷり墨を含み、肥瘦のある線で転折を強調せずに連続させる傾向がみられ、中心軸が斜めになるやや癖のあるものである。そのような特徴は奥書の年記の筆跡と共通するが、年記の「月」と全く同じ字形は本文にはみられず、本文同筆とするにはやや疑問が残る。年代については今後検討が必要であろう。

#### 注

- (1) 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語(統)——「伏屋」「岩屋」「一本菊」外——」『斯道文庫論集』第五集 昭和四十二年七月
- (2) 菅原領子「白ぎくさうし」解題」(京大文学部国語学国文学研究室編『京大蔵むろまちものがたり』第四巻 臨川書店 平成十四年)による。なお、制作年は補った。
- (3) 松本隆信編『影印室町物語集成』第二集 汲古書院 昭和四十五年 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第十一 角川書店 昭和五十八年
- (4) 松本隆信「資料翻刻 大洲市立図書館蔵「もと菊の物かたり」」『芸文研究』第二十八号 慶應義塾大学芸文学会 一九七〇年二月
- (5) 横山重編『室町時代物語集』第三 井上書房 昭和三十七年 前掲注(3)『室町時代物語大成』第十一
- (6) 川瀬一馬監修『龍門文庫善本叢刊』第十二巻 勉誠社 昭和六十三年



- (7) 斎藤喜子「刈谷図書館蔵『一本菊』に見られる特質」『相模国文』第二十六号 相模女子大学国文研究会 平成十一年三月
- (8) 伊藤千世「岩瀬文庫本『一本菊』の特質」『愛知淑徳大学国語国文』十七号 一九九四年三月
- (9) 松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二 角川書店 昭和六十三年
- (10) 前掲注(2)『京都大学蔵むろまちものがたり』第四卷 前掲注(5)『室町時代物語集』第三
- (11) 中野幸一編『奈良絵本絵巻集』五 早稲田大学出版部 昭和六十三年
- (12) 中野幸一編『奈良絵本絵巻集』十一 早稲田大学出版部 昭和六十三年
- (13) 石川透編『室町物語影印叢刊』一本菊』三 弥井書店 平成十二年三月
- 石川透「『一本菊』翻刻」『むろまち』第五集 室町の会 二〇〇一年三月
- (14) Jacqueline Pigeot, Keiko Kosugi, *LE CHRYSANTHÈME SOLI-TAIRE édition du manuscrit Smith-Lesouëf japonais 96, introduction et traduction*, Bibliothèque nationale, PARIS, 1984
- (15) 登場人物についてのメモ書きと、原稿用紙を折り、大和綴に仕立てた「ひとときく」訳」と題簽のついた冊子一冊である。
- (16) 市古貞次『中世小説とその周辺』東京大学出版会 一九八一年二四九頁
- (17) 表紙は浅黄色で、和紙で覆われている。右上に「ひとときく」と墨書きがあり、左下には菊の絵が描かれている。右下に「雪」と金文字で記され、朱印も押されている。
- (18) 前掲注(14)

ENGLISH SUMMARY

Reprint and bibliography of "Hitomotogiku" owned

by Gakushuin University  
TANISHIMA Miwano

The Department of Philosophy at Gakushuin University possesses the Naraehon "Hitomotogiku". It is the third book of three volumes because it lacks two-thirds of the text from the beginning. It has eight pictures. The pictures are framed with light blue and white haze at the top and bottom and are additionally adorned with gold or silver clouds. The architecture is unnatural but the rendering of the figure and paintings-within-a-painting are depicted in detail.

There are various copies of "Hitomotogiku" with different contents. Text is classified into two types: A and B version. Comparing Gakushuinbon with other books, its text belongs to A version and is, therefore, quite similar to the Naraehon owned by The National Library of France, as a part of its Smith-Lesouëf collection.

There is a valuable statement in the end of the book "永禄三年八月上旬書之了". This paper presents a bibliographical commentary and an entire reprint including pictures of this book.

Key Words: "Hitomotogiku", Eiroku 3, otogi zoshi, nara ehon, narrative painting

凡例

- 一・ 底本は学習院大学蔵奈良絵本一冊である。
- 一・ 本文は底本を忠実に翻刻することとし、誤字、脱字、送り仮名等も底本のままとした。
- 一・ 漢字は新字体のあるものはこれに改めた。
- 一・ 底本の改丁ごとに丁数とその裏表を（ ）内に記した。

【翻刻】

まつかのつほねを御らんしけれ  
はなひしはやなき五つきぬき  
てさくらつくしのこうちきも  
みちきぬかたはらにぬきてを  
きひきものによりかゝりうちふ  
したるまくらにより給ひて  
おはしける宮仰けるやういかに  
やおなしゆかりと思ひ給へよとふら  
はんとてまいりたりとの給へはな  
いし承りひやうふきやうのみや  
にてわたらせ給ふにやとてもみ  
ちきぬひききてちとなやむ  
ことにてふして候と何となく  
申てうちそはみたるけしき兵へ  
の介思ひつきけるもことはり  
なりされとも我うしなひてな（一オ）  
けく人にはおとりたり人を御らん  
つるにつけてもひめ君こひし  
くおほしけり又かたはらを御らんし  
ければやなきかさねのあふき有  
けるを何となく御らんしければけん

そうくわうていのやうきひとつ  
 れさせ給ひてりんそうきうに  
 みゆきなりなんてんのうちやうく  
 しつまりものすこくしてけい  
 しやううんかくのそて風にひ  
 るかへすたひにたへまのかさり  
 おちくもるなるのちにこと  
 ならずちやうせいにてんに出給ひ  
 みかとやうきひのてをとり給ひ  
 ててんにあらはひよくの鳥と  
 なり地にあらはれんりのえたと (二ウ)  
 ならんとちきり給ひて立ける所を  
 あふきにかゝれたり宮是を御らん  
 すれはなひし申けるは昔もためし  
 あれはこそゑにもうつしつたふ  
 らん今人ことになしき恋をするとして  
 やうきひのことつてしけるむかしより  
 いきてわかるゝわれそかなしき  
 と申ければ宮今よりはかやうに  
 いひてこそなくさみ候はんつれ  
 ゆかりの草と思ひ給へとせんし  
 有ければなひしあらかたしけ

なやとそ申ける (二オ)  
 「挿絵 第一図」(二ウ)  
 扱宮かへり給へは人こそおほ  
 ければりまのさんみ参らせて  
 内へ参りみかたと申やうひやうふ  
 きやうのみやこそなひしのもとへ  
 かよわせ給ひ候へかのなひしをせん  
 しなりて四ゐの少将にあはせ  
 たひ給へと申ければみやうふのつ  
 ほね是を聞てなひしのつほねに  
 かたりけるやうさんみこそしかく  
 との給ふなれと申給へはなひし  
 心うや誰ゆへにあかぬわかれをし  
 てものおもふ身とはなりぬるそ  
 やこれにかくて候はゝいかなる  
 ことも候はぬさきに大りをま  
 かり出んと思ひ候なりうれしく  
 もきかせ給ひ候物かな此世に (三オ)  
 おきていかてか忘れ参らせんや  
 かてこよひまかり出候はんとした  
 まへはみやうふ御名残をしみなき  
 給ふなひしめのとのもとへふみをつか



い給ひてちと風の心ちありしは  
らくいたはらんと思ふなりのり物  
いそぎくとか、れたりあはて、  
くるまを参らせければなひしさ  
すか御名こりをしくてわれ十三  
より参りてことし七年になる  
そかし何とつかまつりける御みや  
つかひのはてそやとかなしみてしは  
らく出もやらすみくるしき物  
ともとりひそめて出けるころは  
やよひ十日あまりの事なれは  
おほろ月花のこすへにまか（三ウ）  
いてことにあわれにみへしかは命  
ふのつほねかくそなかめ給ふ  
我あらは猶たちかへれ春かすみ  
うらみに思ふくもあなりとも  
との給へは返事なひしかくなん  
春かすみ立はなれなは雲に入  
月に出るとめくりあふへき  
かやうにうちなかめてなひしなく  
くくるまにのり出給ふめのと  
のもとにゆきつきてその

ま、うちふしなくより外の事そ  
なきさるほどにそのとしのくれ  
ほどにめのと所りやうたまはり  
てなひしのまくらにたちより  
申やうふんこそ悦にあひ候へ  
さつまの国を給はつてこそ候へ（四オ）  
た、ならはかくはかりよろこふ  
へきに候はねともゆへなくな  
かされ給ひし兵への介とのおはし  
ますかたにて候とても御みやつ  
かひもすさましくおほしめし候は、  
思ふにはとらふすのへくしらのよ  
る嶋と申ためし候なりいさ、せた  
まへさつまの国へくし参らせんと申  
せはなひし悦て父母にかくれ  
めのとばかりを頼やよひ廿日  
ころに都を出いつしかならはぬ  
ふねのうちのすまひなみのうへ  
の心ほそくあげぬくれぬとゆ  
くほとにさつまたたへそつきに  
けり国のしんはいまつりことし  
かるへきやうにしてめのと人に（四ウ）

とひけるは なかされ 人の住 たまへる  
 所やしるし たるか をしへ給へ とあり  
 ければ 人の申やう なかされ 人のわ  
 たり候所は 是より ほとなく はつか  
 廿四てう と申 ければ (五才)

〔挿絵 第二回〕(五ウ)

めのと悦ひめ君に申やう御  
 ふみあそはして参らさせ給へこれ  
 よりほとなく候と申ければ取あへす

身をすて、みるめかりにやあたまみの

うらまで舟をいそぎけるかな

おほろけにやなんと、か、れたり

なひしのめのとこにいまたわらは

にて有けるをめて是をもちて

参れとてよくをしへて参らせけ

れはかの所へ尋ゆき兵への介殿

に御ふみ参らせければ悦給ふ事か

きりなしやかて返事あり

あたまみのうらにいかなる契りして

身をすて、のみみるめかるらん

とかくの申事なした、いそぎく

いらせ給へとか、れたりめのと悦 (六才)

てあしろのこしにのせ奉りて  
 をはしますなひし御らんつれはいそ  
 へにつくりかけたる家のさすかよ  
 しあるていに見へたりいそのまつ  
 風いと身にしみ給ふらんかゝる所  
 におはしたるよとみるに涙もと

とまらすたかひにやせくるみたる  
 恋のすかたにてとかくのことは  
 も出すや、ありて御物かたりあり

わかれしよりいま、ての事ともかたり

給へはよその袂もしほりけり

さるにてもみやこには何事

か候ひつるとと給へは (六ウ)

〔挿絵 第三回〕(七才)

なひし申給ふ三条のひめ君こそ

うせ給ひて候へ宮はた、一すちの

御物おもひにてくこをもきこし

めさすとかたり給へはひやうへの介殿

なひしに合給ひ此ほどのこと、

もすこしはる、心ちしたまふに

いもうとのひめ君うせ給ふとき、

給ひて又かきくらす心ちしてあ

はれさたとへんかたなしさおもひ  
つる物を命をやうしなひつらん  
又いかなるものにとらせてや  
あるらん今は此世にあらしされ  
は今一とあふ事もかたかるへし  
さらは出家をもした、一すちに  
此人のこしやうをとふらははやと  
おもへとも父母にもかくれ我を（七ウ）  
たのみくたり給へるなひしをうち  
すて奉らんもさすかにおほえて  
今しはらくほとへていかにもな  
らんとおほしめし今迄はまい日  
御きやうよみてはいもうとの頼  
かたなきをあんおんにといのり  
給へとも其後は御経よみ給へと  
もいもうとのこしやうたすけたひ  
給へと朝夕いのらせ給ひけるさる  
ほとにひめ君は京にて四てう  
あたりををしこめられてなきふ  
し給へりその家のあるしのした  
しき物はりまの国のもくたい  
にてあり折ふし此いへに入れる

かすきさまに此さしきのかた  
をみるほとにひめ君を物こし（八オ）  
にみ奉りあらうつくしやとを  
もひうちへ入てまついふへき事  
はさしをきて此さしきにはいかなる  
人のすみ給ふやらんさもうつくしき  
すきかけのみへつるはといひけれ  
はあるし申やうあれはやことなき  
人の世を忍ひておはしますとか  
たりければあわれとかむる人おは  
せすは我にあわせ給へかしたれ  
もいちことほしき事あらせしと  
申ければあるし思ひけるははり  
まのさんみはいかにもしてうしなひ  
奉れとの給へともいたはしさに  
あかしくらすなりさらは此人に  
あわせはやと思ひむすめ十二三  
はかりなるをよひてけふはさしき（八ウ）  
とのへ参り御みやつかひ申て夕さり  
はしやうしのもとにふしてかけか  
ねをはつしあの人を入参らせよ  
とよくくをしへけるれいなら

すきりめきはたらきければ  
 少将あやししく思ひて此ものをす  
 かしとはんと思ひうれしくも参り  
 たりなどや此ほどは参らざりしそ  
 今よりは我をおやとおもひてい  
 わん事を何事も人にかたるな  
 よ我も人にかたるまじさるにて  
 もさきくはまいらざりしか何の  
 やうに参りたるそとひとつも  
 へたてなくありのまゝにかたれ  
 よゆめく人にいふまじとさ  
 まくにとひければおさなき(九才)  
 ものにてなに心なくありのまゝ、  
 にそかたりけるひめ君聞もあ  
 えすなき給ふこんの少将あらうら  
 めしの御事やひやうへの介殿なかさ  
 れ給ひし時つゆともきへさせた  
 まふへきにいまゝてなからへさせ  
 給ひてかゝるうきめを御らんする  
 事のかなしさよねかはくは神仏  
 たすけ給へといのりけるこそあは  
 れなれけふはひもくれすして

あれかしとねんしけれともかひ  
 そなきさるほくにひもくれけ  
 れはこんの少将おさあひものを  
 我あとにふさせて我身は姫君  
 のおはしける所にふし夜ふかく  
 なりぬれは火をしやうしよりあな(九ウ)  
 たへとほしかけかねよくかけした  
 たためて清水のかたへむかひて  
 なむ大ひくわんせおん我十三より  
 月まふてを申卅三くわんの御経  
 をよみ参らせしひくわんむなしから  
 すは姫君の夜のうちのなんをは  
 らひてたひ給へそれかなはぬもの  
 ならば御命をとらせ給へと申ける  
 されとも夜ふけ、れはかの大ゆふ  
 きたりてこゝあけよやおさあい  
 ものとしてしやうしうちたゝきひ  
 きけれともうちよりつよく  
 かけたれはひけともさらに  
 あかさりけり(十才)  
 〔挿絵 第四回〕(十ウ)  
 しきふの大夫おそろしきこゑに

てあらおこかましやこよひこそ  
入させ給はずともあしたはとくく  
参りけんさんに入参らせ候へき  
よしこよひはゆるしまいらせ候とて  
帰りけるこそくわんおんの御たす  
けとうれしくこよひこそのかるゝと  
もあすはをし入なんと心うくて  
ねもいらささしきたかくてい  
つくよりもれいつへきやうも  
なし四てうおもてのしとみたかく  
あけければう月の月なれはく  
まもなくことにもあわれな  
るあかつきかみのかたよりふへ  
のねかすかに聞えける是きか  
せ給へひやうへの助殿のおもし（十一オ）  
ろくふき給ひし物をいかなる所にて  
いかにならせ給ひけんあさましの  
事ともやとなき給ひてかとのか  
たを御らんして入らせ給へは車  
のおときこえふえのねちかく也  
けりめのと申やうひやうふきやう  
のみやの御ふえのねににさせた

まへるものかなと心をしつめてき  
きければふえふきささひて  
まことにけたかき御こゑにて月  
はくまなくてらせともどもに  
なかむる人もなしあはぬ物ゆへよ  
もすからはかなき恋ちにほた  
されてたいあんたうをたつぬと  
て月にのりてそゆきかへると  
ゑいし給ひけるを聞ければみやの（十一ウ）  
御こへにてわたらせ給ひけりいかに  
とむねうちさはきけり宮はおほし  
めししつみたまひて清水に参り  
給ひ七日御こもりありて御下かう  
なり四てうおもてを過ぎせ給ふ  
ときわも御ともにてむまのうへに  
みへてありうれしさがきりなくて  
こんの少将すこしも忍ふ事  
なくもちたるあふきにてまね  
きあれはときはかといひければ  
たれなるらんとさしきのきはへ  
むまうちよせければ（十二オ）

〔挿絵 第五回〕（十二ウ）

ときはにてをはするかこんの  
 少将こそこれに候へたちよらせ  
 給へもの申さんといひければ  
 ときはこんの少将にてましま  
 すかうれしさと申ける少将申  
 やうはりまの三ゐにをしこめ  
 られて此ほどうきめを御らんし  
 てこそおはしましたはかり出し  
 まいらせ給へといひければときは  
 聞もあへず御まち候へとて宮  
 の御くるまにおひつき参ら  
 せていまたともかくも申さて御  
 くるま給はらんと申ければみや  
 何事ともき、はけさせ給はねと  
 ときわか申事なれはおりさせ  
 給ふ御くるま給はりてかの所へや (十三才)  
 り入てこ、あけよやはりまの三  
 るのもとよりそこよひの御との  
 いはたそはやくあけよといひ  
 ければさんみといふにしたかひて  
 やかてかとをあくる車をやり  
 入はやくめせと申ければひめ

君のり給へは人くうれしさゆめ  
 の心ちしていそき御とも申けり  
 宮は御くるまにのりうつらせた  
 まひてわかれ給ひしより今まで  
 の御恋しさいかなる所におはし  
 ますとも風のたよりのおとつ  
 れをもなとやかくともしらせた  
 まはぬそとらみ給へは姫君  
 たよりをもいはまほしきを山風の  
 いはまの水にせかれけるかな (十三ウ)  
 宮是を聞召返事にかくなん  
 せかれけるいはまの水をしらすして  
 もらさぬとのみうらみけるかな  
 かやうに仰ありて御車をはさぬ  
 きかもとへとありければ御めの  
 とさぬきのもとへ入らせ給ふひめ  
 きみもた、ならすいらせ給へ  
 は八月に御さんの月なれば御い  
 のりかきりなしその御しるしにや  
 あたる月にもなりしかは御さん  
 へいあんに若君出き給ふ宮  
 御よろこひかきりなし (十四才)



〔挿絵 第六図〕（十四ウ）

〔挿絵 第七図〕（十五オ）

若みやとうくうに御たちある

みかとのせんしあるやうまつさつ

まのかたへなかさされし兵への介をぬ

しかへすへしとて御むかひ参り

けり兵への介御悦かきりなし

た、よのつねにてめしかへさん

たにもうれしくおはしまさん

いわんやゆくゑもなくうせ給ひし

ひめ君きさきにた、せ給ふ事

一かたならぬ悦に若宮さへ出き

させ給ひてめしかへされんことの

うれしさよとて侍従のなひしと

うちつれて都へのほり給ひけり

心のうちいかはかりうれしくおほし

けん仏神三ほうのかこおはし

ければなみ風なんなくのほり（十五ウ）

なくのほり給ふほとにはやく

とはへつき給ふ御むかひの人く

かすをしらすまつせんそなれば

とて三条へ入らせ給ふはりまの

三位四ゐの少将あはてさわき

内より出けりあら物さはかしまつ

しはらくおはせようかりし事

のものかたりせんとありしかとも

うしろをたにもみかへらすして

出る兵への介殿あけんもおそし

とてきさきの御かたへそ参りた

まひけるなかされ人ひやうへの介殿

こそ参り給へと申せはきさき出

させ給ひてわかれ参らせし時の

かなしさ今のうれしさいつれも

おろかならすとてうれしさなき（十六オ）

になき給ふひやうへの介殿これ

を御らんして

ふえ竹のなきしうきねもわすられず

うれしきふしをみるにつけても

きさきの給ふやう我よりもみかど

のなをもこひさせ給ふにまつとく

とく参り給へとありければ明も

せてまた夜ふかきにうちへ参り

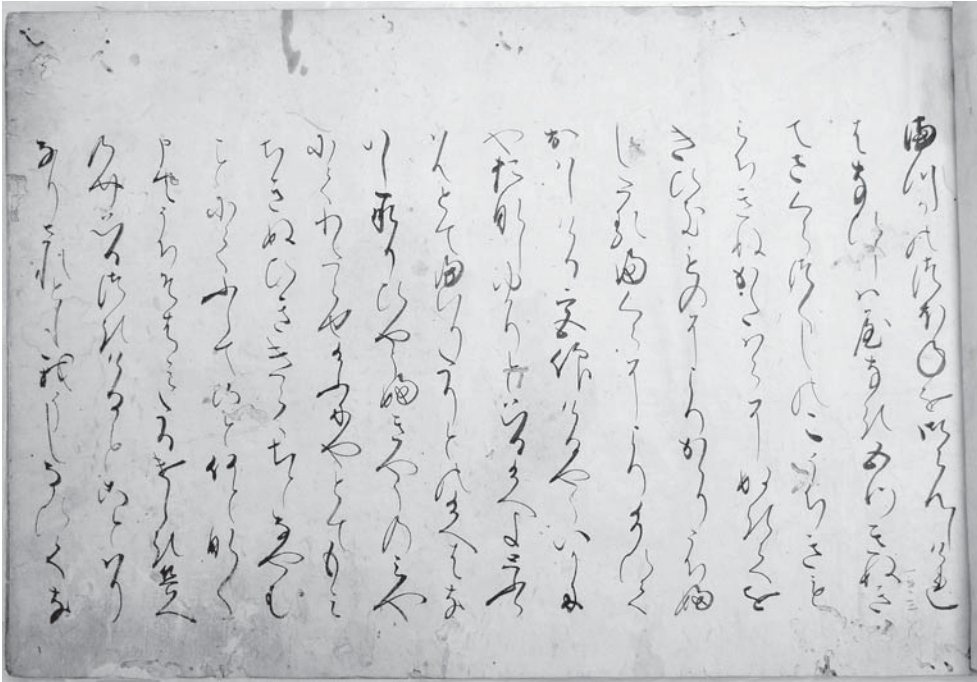
給ふみかどせいりやうてんより御

らんいたさせ給ひていかにやしめ

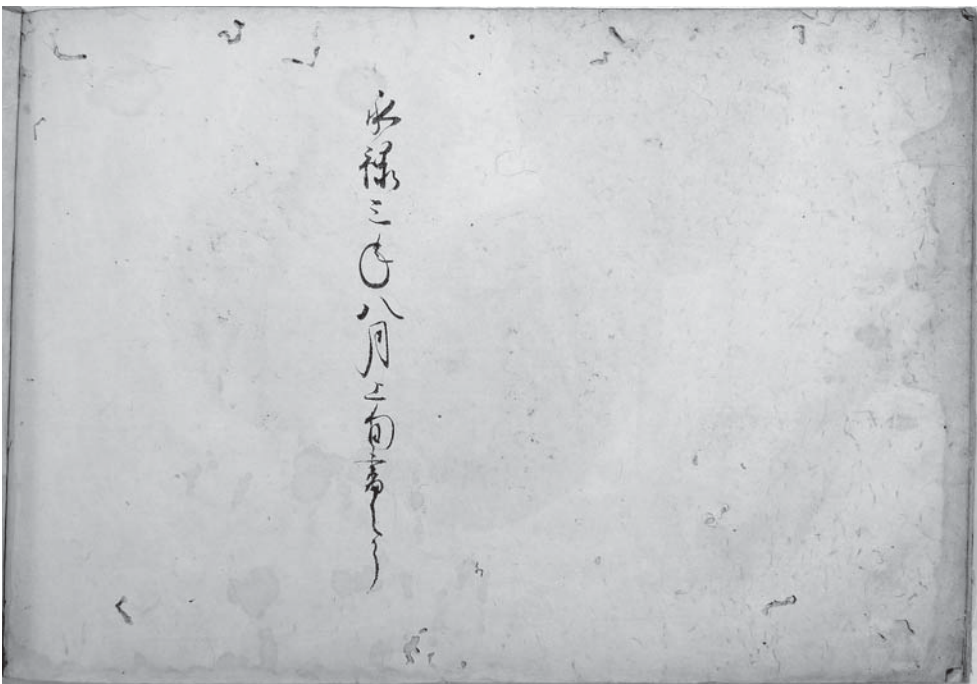
ちかはらとちきりしはこれにい  
 いしそや今の悦にはさんみの  
 中将になすへしとせんしなり  
 うちつ、き二ゐの大納言に  
 なり給ふ御かとさてもはりまの  
 さんみ四ゐの少将そつの君をは (十六ウ)  
 いか、はからふへきさつまのかたへな  
 かすへきかとせんしありければひ  
 やうへの介の給ふやう仰はさにて  
 候へとも父う大しん草のかけに  
 てもみ候はん事もあはれに候へは  
 今との悦にるさいを御と、め候へと  
 申されければさるにてもあまりにく  
 き物なればかふりをはいくわんをと  
 とめてもなをあさくおほゆれば  
 かれら親子三人をは都の内を出して  
 やとさためぬ物となすへしとのせんし  
 にて九えの中を出され参らせけり  
 さる程にきさき又うちつ、き二の宮  
 出き給ふ其御悦に大納言くわんは  
 くてんかとそ申ける侍従のなひしは  
 北の政所とそ申ける (十七オ)

「挿絵 第八回」(十七ウ)  
 御かとも若宮二人姫みや二  
 人出きさせ給ひぬ一の宮に  
 御くらゐをゆつり給ひて二の宮  
 とうくうにた、せ給ふひめ君  
 一人は伊勢さいくうにたちたまふ  
 今一人はかものいつきにた、せ  
 給ふかた／＼めてたくさかへさせ給ひ  
 けりくわんはく殿もわか君ひ  
 めきみあまたおはしますちやくし  
 とうの中将二郎殿は三ゐの中将  
 三郎殿は四ゐの少将とそ申ける  
 みる人きく人めてたき御くわほ  
 うとそ申けるひめ君うつくしく  
 いらせ給ふ事かきりなし一のみや  
 くらゐにつかせ給へはきさきに  
 た、せ給ひてむめつほのきさ (十八オ)  
 きとそ申けるこんの少将はな  
 いしのかみになりさへもんの  
 つほねはきこゆるなさけ人也  
 とてかた／＼の御おほえいみしく  
 ありて中つかさの中将になされ

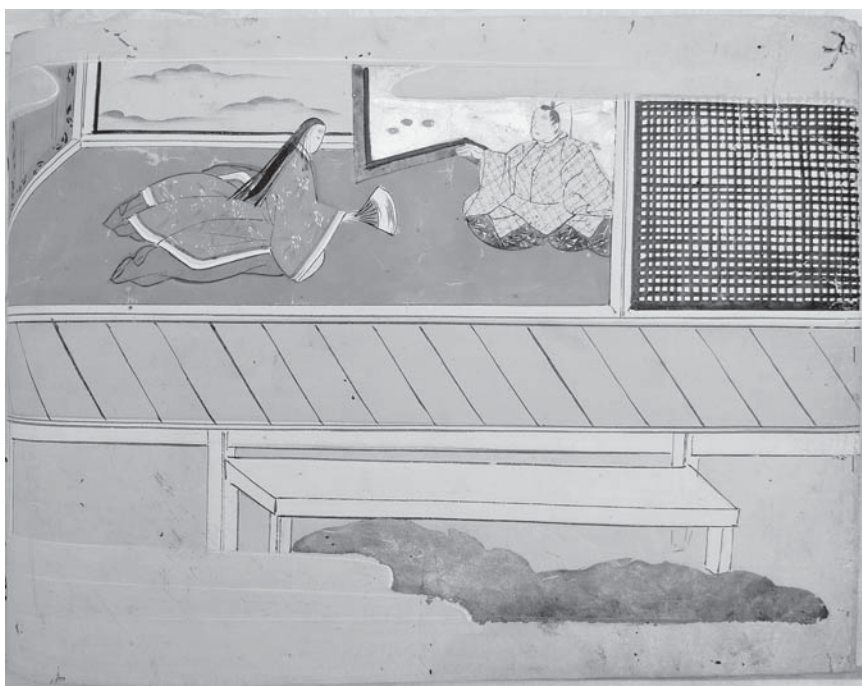
たりかくかたくゆくすへはる  
かにさかへ給ふめてたきためし  
にそ申けるむかしか今にいたる  
まで仏神三ほうの御ちかひ  
いづれもおろかならずおはしけ  
れともことにくわんおんの御り  
しやうにすきたる事そなきな  
さけあらん人はゆくすへかやうに  
さかへ給ふへきなり心わろくして  
人をにくみ我子はかりを思ふ  
ものはゆくすゑわろき事めの（十八ウ）  
まへの事なりうきめをみる事  
も是心わろくもつゆへなり  
人をもいとをしくおもひしひ  
に心をもつ人はかやうにゆく  
すへはんしやうにさかへ給ひて  
めてたき御くわほうあるなり  
これを御らんし候はん人くは  
きよ水のくわんおんをよくく  
御しんかうあるへし返くめて  
たき御くわほうとそ申つたへけり（十九オ）  
永禄三年八月上旬書之了（十九ウ）



【図1】 冒頭



【図2】 奥書

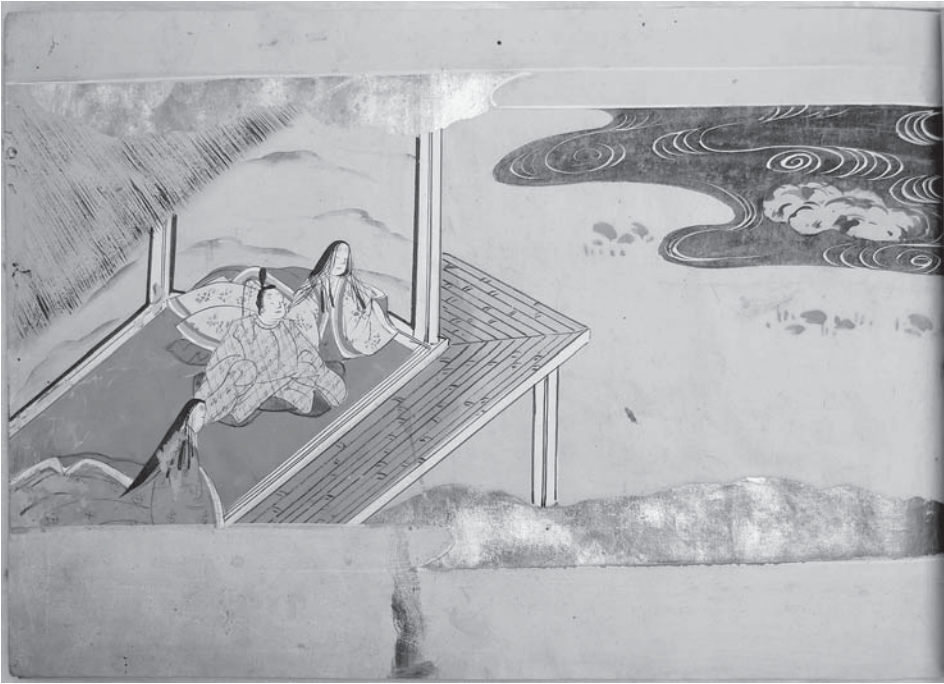


【図3】挿絵第1図

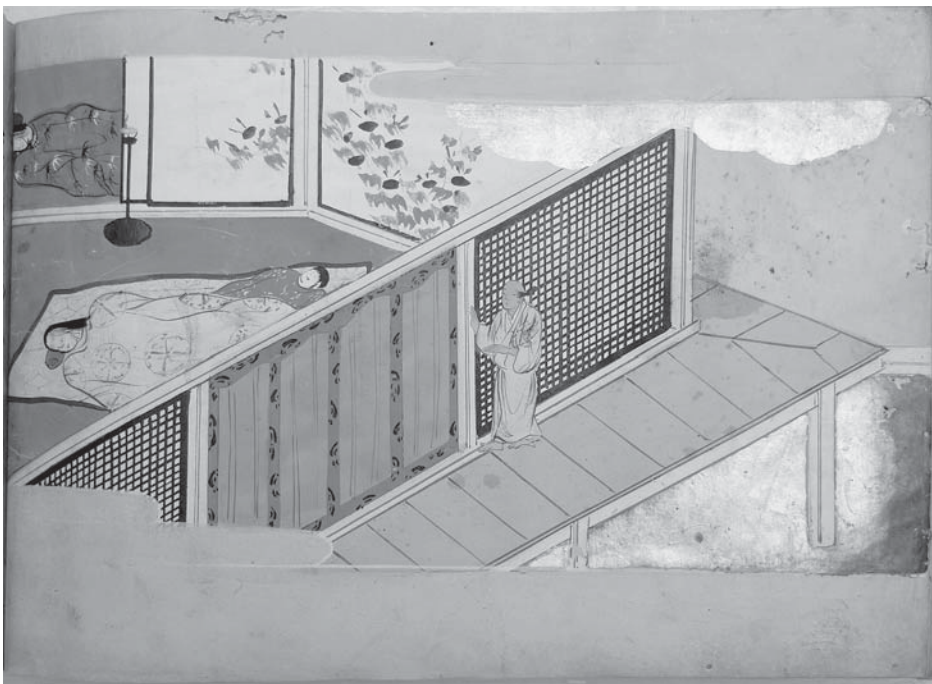


【図4】挿絵第2図





【图 5】 挿絵第 3 图

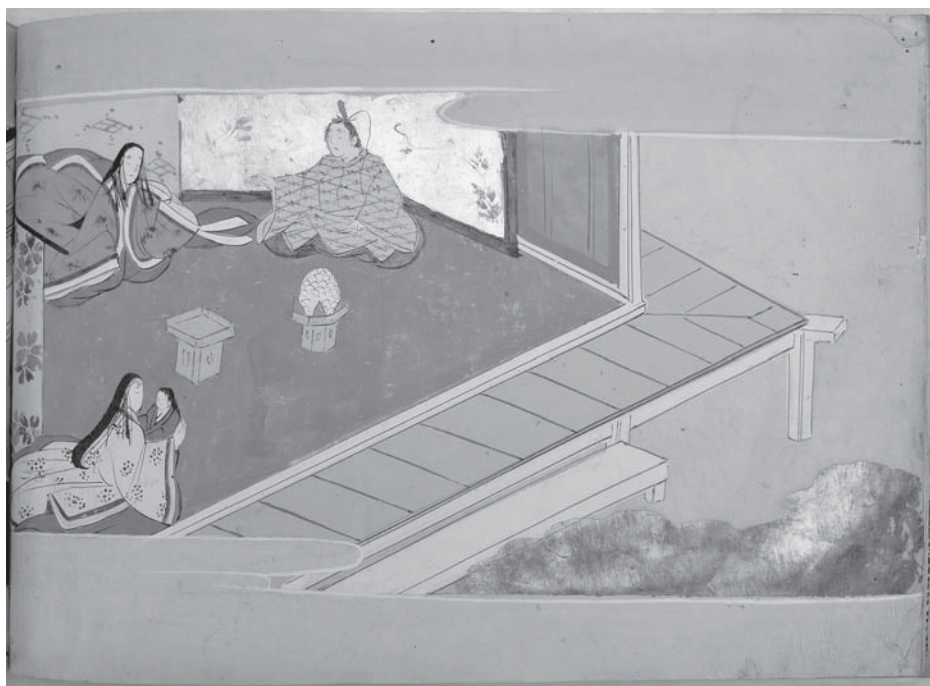


【图 6】 挿絵第 4 图

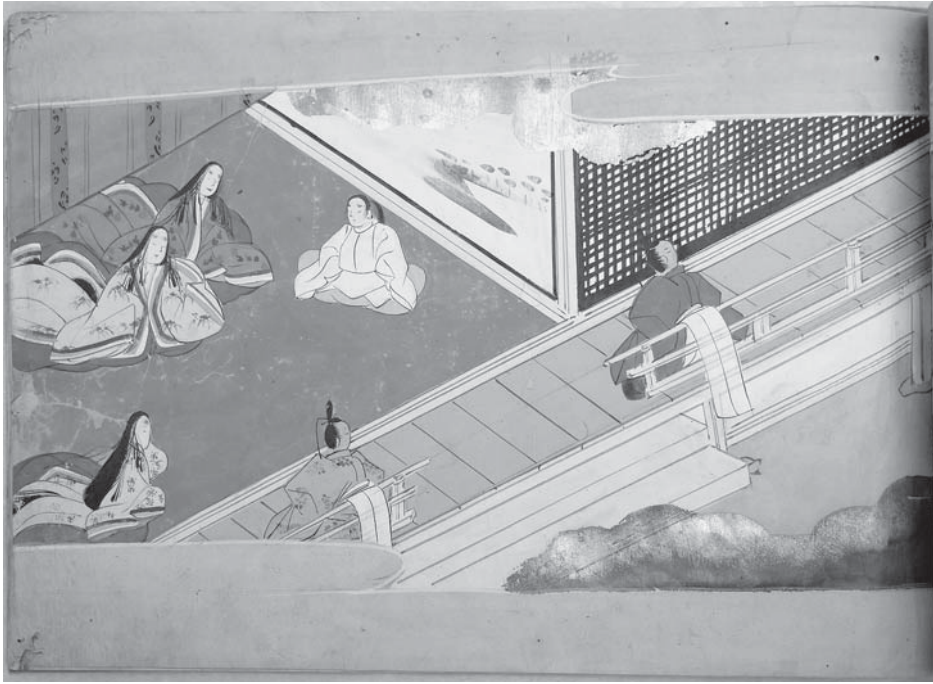




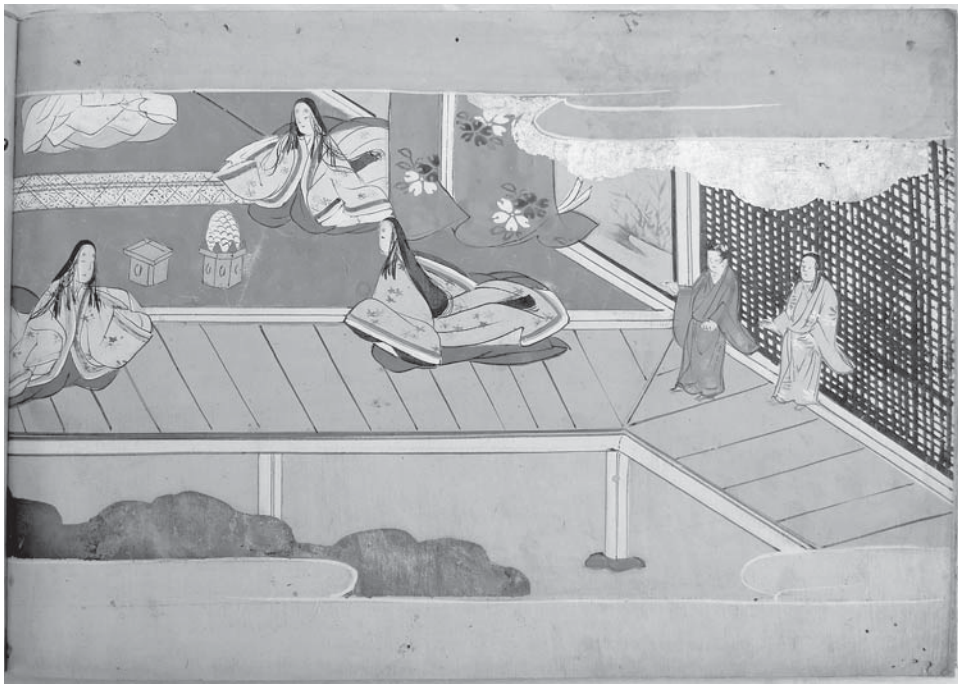
【図7】 挿絵第5図



【図8】 挿絵第6図



【图9】 挿絵第7図



【图10】 挿絵第8図